

聖書と環境問題
—『回勅 ラウダート・シ』を中心に—

瀬 本 正 之

2023年3月

藤女子大学キリスト教文化研究所
紀要 第22号

聖書と環境問題

—『回勅 ラウダート・シ』を中心に—

瀬 本 正 之

皆さんこんにちは。拍手をもらったのでもう話し終えたような気分ですが… (笑)。

- I. 『回勅 ラウダート・シ』の中の聖句
- II. 自然と仲直りするための3つの心得
- III. 自然への然るべきかわりの模索は創造主に対する責任

今日のテーマは「聖書と環境問題」で、話の流れは以上の通りです。この企画の開始当初（二年以上も前だったでしょうか）から、話の中で「聖書」に触れるように、というご要望がありました。そこで『回勅 ラウダート・シ』の中で引用や参照がなされている聖書の箇所を主にしてお話をさせていただきます。一時間ちょっとのお話ということですので、そのすべてを網羅することはできないでしょうが、ご容赦ください。

それでは、『回勅 ラウダート・シ』の中の聖句を順番に見ていきましょう。因みに、以下、四角で囲んである数字は「頁」番号でなく「パラグラフ」番号です。言語や装丁の違いによって、日本語でも何行で1頁、何字で1行というふうにして、頁は変わりますが、原著のパラグラフなら大丈夫、ということです。

I. 『回勅 ラウダート・シ』の中の聖句

- ② 重荷を負わされ荒廃させられた地球は、見捨てられ虐げられた

もっとも貧しい人々に連なっており、「産みの苦しみを味わって」(ローマ8・22) いるのです。わたしたちは自らが土の塵であることを忘れてしまっています(創世記2・7参照)。

「ローマの信徒への手紙」8章の中の「産みの苦しみを味わって」が引用されています。地球が荒廃しつつある、貧しい人々が見捨てられつつある、この二つのことはつながっている。誰でも考えればわかることでしょうが、わかるだけではなく、本気でそれを認めた上で実際に何かをしなくてはいけない、ということですね。

カッコの付いていない後半の文章「わたしたちは自らが土の塵であることを忘れてしまっています(創世記2・7参照)」は創世記の該当箇所参照ですが、土の塵から造られた、塵から出来ているのがわたしたちの存在だ、ということです。カトリックのクリスチャンは「灰の水曜日」に頭か額に灰を受けます。わたしはこれが大好きです。こうして、土の塵から造られた存在だ、ということ少なくとも年に一度、四旬節の初めに実感させてもらいます。しかもいっしょに、この「灰の式」に参加します。自分一人だけでなく、皆が土の塵から造られた存在だ、と互いに認め合うのです。

「塵から取られた者よ」というふうな言葉を味わいながら灰を受けます。それは、ささやかな、小さな、取るに足りない存在だ、という意味だけではなく、お造りくださったのはいつくしみ深い創造主です。その方の愛によってわたしたちは造られた、ということをも思い起こします。小さな存在であるわたしたちは、偉大ないつくしみそのものである創造主とつながっているのです。この偉大な方の似姿、神の像であるわたしたち人間は、一方では自分たちの小ささを、もう一方では自分たちの尊さを認め、互いを尊い存在として受け入れ合い尊重し合うよう、促されます。

12 「造られたものの偉大さと美しさから推し量り、それらを造ったかたを認め」(知恵13・5) ます。

実に、「世界が造られたときから、神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して知られていた」(ローマ1・20) ので

す。

前半は「知恵の書」からで、「造られたものの偉大さと美しさから推し量り」とあります。

通常、自然界と言う場合、それは天使を含む被造界とまったく同じものとは言えませんが、今日の話では、被造界を大雑把に自然界と見なさせていただきます。自然界は、わたしたちが目にし、耳にし、嗅ぎ、触れ、味わう自然物から来ています。さまざまの被造物を美しいもの、すばらしいものとして感じ取ることを通して、それらをお造りになった創造主の美しさと偉大さに思いを致すのもわたしたち人間の心ではないでしょうか。

後半は「ローマの信徒への手紙」1章からです。被造物は創造主なる神ではないので、被造物を礼拝の対象にしてはなりません。でも、被造物の美しさやすばらしさを通して、創造主の永遠の力と神性が現われている、と言われてます。

65 男と女を創造なさった後、「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それはきわめてよかった」(創世記1・31) のです。

すべての人は愛から創造され、神にかたどり神に似せて造られた(創世記1・26参照)と聖書は教えます。

創造主は、「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた」(エレミヤ1・5)とわたしたち一人ひとりということがおできになります。

「きわめてよかった」という言い方がされています。人間が男と女に造られた、その後で言われていますので、人間がきわめてよい存在だ、というのが意味の核心だ、と早とちりする人が多いようです。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった」と書かれています。最後に造られた男女の人間を含め、神がご覧になったのは「お造りになったすべてのもの」ですから、当然のことながら人間も含まれていますが、人間だけを他の被造物から切り離し、そうして切り取られた人間だけが

すばらしい、と言っているとは言えませんね。人間として造られたわたしたちは他の被造物といっしょに一つの被造界を構成していて、そうした被造界の全体が見事だ、というふうに受け取った方が真意に沿っているでしょう。人間は他の被造物といっしょにあるはずの存在で、他の被造物と離れてしまった人間は本来の意味での人ではなくなる、とさえ言えそうです。それはまた、最後に造られた被造物である人間が、神によって造られたあらゆる被造物を管理し、治め、支配し、世話し、育て、発展させる責任を負うべき存在だ、ということでもあります。人間を含むすべての被造物から成る被造界は創造主の目にすごくいいものと映ったということなのでしょう。わたしたち人間と他の被造物の間の然るべき関係、創造主の目に映る本来の関係とはどのようなものなのか、と考えさせられますね。

次にくるのが「エレミヤ書」、預言者エレミアの預言の書です。そこでは、わたしが母親の胎に存在し始めるその前から、創造主である神はわたしのことをご存じだった、とあります。母の胎で受精卵から始まる人間のいのちはどれほど尊いか考えさせられます。そして、「きわめてよかった」との創世記の言葉と関連づけてみると、人間であるわたしたちにはどれほどの尊厳が賦与されているか、また同時にどれほどの責任を委ねられているかに思いを致さないわけにはいかなくなります。

66 わたしたちがずうずうしくも神に取って代わり、造られたものとしての限界を認めるのを拒むことで、創造主と人類と全被造界の間の調和が乱されました。このことによって、わたしたちに賦与された、地を「従わせ」（創世記1・28参照）「そこを耕し、守る」（創世記2・15）という統治の任にゆがみが生じたのです。

その結果、もともとは調和が取れていた人間と自然とのかかわりが不調和を来すようになりました（創世記3・17-19参照）。

ここには、今日のお話の要の一つがあります。人間というのは、関係（に貫かれた）存在であって、わたしたちの存在は無数のかかわりによって成り立っている、という点です。それら無数のかかわりを分類し整理し直しますと4つの基本関係が見えてきます。

まず、自分自身とのかかわりです。よく使われる言葉に実存というのがありますが、それはまさにこのことを指しています。自分自身と隔てをとってかかわることのできる存在、それが人間です。自分は何者か、どのような生き方をすればよいか、と考えめぐね、悩みながら選択し、決断していくのが、わたしたちの常です。いわゆる実存的なあり方です。人間以外の目に見える被造物には、こうした自分自身とのかかわりを生きるといったあり方は見られません。人間は確かに動物の一種ではありますが、ただの動物ではありません。こんな生き方をしてきたが本当にそれで良かったのだろうかとか、これからはどのように生きていこうとか、どんな自分になっていけばいいのだろうかとか、そうした責任を感じさせる自問は、目に見える被造物の中では人間だけが持ち得るものではないでしょうか。どんなに知能が高いと思われる動物もこうした「己（おのれ）にかかわる問い」を持つことはないでしょう。

もう一つは他者、他の人とのかかわりです。皆さんは今ここに集まって、わたしの話を聞いてくださっています。薄いか濃いかは別にして、何ほどかの関係が存在します。すぐに拒否したくなるかも知りませぬけれども（笑）、関係が出来た、出来つつあるわけですね。身体的な距離も関係の次元ですが、それだけでなくいろんな意味での他者との関係があります。他の人との関係を全部取り去っていったら、わたしという存在はどうなるでしょう。残るものは何もないのかも知れません。

三つ目は自然とのかかわりです。今日は大雑把に自然物＝被造物としていますが、人間以外の自然物つまり人間以外の被造物とのかかわりのことになります。たとえば、食べ物。わたしたち、いのちあるものは、ものをエネルギーに変えて生きています。水、これは、生きていく上でもっとも重要なものと言っても過言ではありません。自然とのかかわりがうまくいっていないと、健康が損なわれ、ときには死んでしまいます。空気を吸ったり、水を飲んだり、何かを食べたり、いらなくなったものを排泄したり、といった自然とのかかわりが、わたしたちが生きている、というリアリティを可能にしてくれているのです。

四つ目は神とのかかわりです。何の根拠もないことを無理に言い立てているように思われる人がいるかも知れませんが、存在しているということ自体が神とのかかわりがあるということの証拠ですよ、と言ったら

どうでしょう。自分（あるいは何でもいいのですが）は存在している、と本気で肯定するなら、その肯定は、自分からは自分の存在をつくり出すことができないわたし（あるいは何でもいいのですが）の存在を實際にあらしめている何かの存在の肯定が含まれています。そうした存在は、自らの存在の原因でもある存在でなければなりませんね。わたしは自分の存在をつくり出すことはできません。他の人（含：両親）も他の被造物もわたしの存在をつくり出すことはできません。難しい言い方を使うと、偶有的な存在の肯定は必然的な存在の肯定を含意する、と言えるでしょうか。神とのかかわりと言うとき、神という言葉はまさに必然的な存在を指しています。隣人を尊重することはその人の存在を認めること、その人が確かに存在しているという事実を肯定することなしにはあり得ませんね。そして、そうした他者の存在肯定は、少なくとも暗に、その人に存在を与え続けている神（必然的な存在）が存在しているということを肯定することに通じている、ということですね。

神とのかかわり、自然とのかかわり、他者とのかかわり、自分自身とのかかわり、わたしたちは皆、これら4つのかかわり（基本関係）によって出来ている、というものの見方が、この『ラウダート・シ』の中で何度も確認されます。それはとても重要でもっとも根源的な人間理解と言えるでしょう。「創造主と、人類と全被造界の間の調和が乱されました」、「もともとは調和が取れていた人間と自然とのかかわりが不調和を」というようなことが書かれているのも、こうした文脈の中でのことです。

67 ユダヤ・キリスト教の考えが、大地への「支配権」を人に賦与する創世記の記事（創世記1・28参照）に基づいて、人間の本性を暴君的で破壊的なものとして描くことで、自然に対する無制限な搾取を助長してきたという告発に対してです。これは教会の理解する聖書の正しい解釈ではありません。

聖書が世界という園を「耕し守る」よう告げている（創世記2・15参照）ことを念頭に置いたうえで、その本文を文脈に沿い適切な解釈法をもって読まなければなりません。

「地は主のもの」（詩編24・1）であり、「地と地にあるすべてのもの」（申命記10・14）は主に属します。

「土地を売らねばならないときにも、土地を買い戻す権利を放棄してはならない。土地はわたしのものであり、あなたたちはわたしの土地に寄留し、滞在する者にすぎない」（レビ25・23）とあるとおりです。

「適切な解釈法」とははっきり言われています。「支配しなさい」、「従わせなさい」という言葉が創世記の第一章にあります。生殺与奪の権というニュアンスで、人間が好き勝手にしていい、というふうには誤解してはいけませんよ、ということですね。

因みに、わたしは「支配する」という言葉がこの頃だんだん好きになってきています。だいたい前のことですが、環境倫理学を始めた頃、聖書やミサ典礼書にある「支配する」という言葉が嫌になりかけた時期がありました。「統べる」とか「治める」とかの言葉にしたらいいいのに、と思っていたのです。それはそれで正しい主張なのですが、漢字の「支配」という言葉が「支える」と「配る」という二つの漢字から出来ていて、王の使命とは、民が必要とするものを配り、民を支えることなんだ、と思いつき、然るべく「支配する」ことの重要性を認識するようにもなりました。わたしたち人間は、この被造界にあつて「配り」「支える」責任がある、人間同士お互いのためにも、人間以外の被造物に対しても。ですから、「支配」という言葉を頭から拒絶してしまうのもちょっとどうかな、と今は思っています。

とは言っても、与えられている大地の支配権を、事実上、好き勝手にいい権利であるかのように解釈しそのように振舞ってきた歴史があることも認めざるを得ません。わたしたち人類はいつごろからそういうふうに振舞ってきたのか、という問いへの答えとして、産業革命からと言う人もいれば、定住農耕生活からと言う人もいますが、わたしとしては、人類にできることが格段に伸び、それと共に、自然界への影響が増大し始めた産業革命の頃からでは、と考えています。ことに技術の進歩が著しい現代、人間に可能なことが指数関数的と言っていいほどの勢いで幅を利かせるようになってきています。わたしたちは何でもできる、と思いついでいるようなところがありますね。

大地を支配することのできる力が人間に備わっていて、その力を使い

放題使っていいんだ、と思い込んではいけませんよ、というメッセージを聖書から受け取らないのは間違った聖書解釈だ、ということです。

「地は主のもの」、いい言葉ですね。申命記にもレビ記にも同じような言葉があります。レビ記の「土地はわたしのもの」の「わたし」は主なる神です。この箇所は、社会問題についてキリスト教がどんなふうに対応し、受け止めどんなふうに対応するか、その基本になる原理を含む有名な部分です。大地は主のもの、自然界、被造物は主のものである。わたしたち人間はそこに住まわせてもらい、そこから得られるものを利用させてもらっている、というような意味合いですね。滞在させてもらう、寄留する、そうした体験をしてきた神の民イスラエルは、外から来た人が自分たちの土地に住み、そこでいっしょに暮らすことに開かれているように、ということです。今のイスラエルがアラブに対して同じような思いを持ってくればいいのにな、とわたしは思っています。かつてアインシュタインも、イスラエル建国に関して、同様のことを語ったという話もあるようです。神の民は自らが寄留民であり、滞在者にしかすぎないと、エジプト脱出の体験を通じて身に染みているので、家のない人、親のない子供たち、支えを失った婦人たち、外国からの入植者たちを大切にするのは当たり前、ということを神の民イスラエルはよく知っているはずだということでしょう。主のものである大地にわたしたち人類は住まわせてもらい、その大地からのものを利用させてもらっているがゆえに担うべき責任があるのです。

68 知性を賦与された人間は、自然のおきてや、地上の被造物間に存在する繊細な平衡状態を尊重しなければならないということです。なぜなら、「主は命じられ、すべてのものは創造された。主はそれらを世々限りなく立て、越ええないおきてを与えられた」（詩編 148・5b-6）からです。

「同胞のろばまたは牛が道に倒れているのを見て、見ないふりをしてはならない。……道端の木の上または地面に鳥の巣を見付け、その中に雛か卵があつて、母鳥がその雛か卵を抱いているときは、母鳥をその母鳥の産んだものとともに取ってはならない」（申命記 22・4、6）とあります。

七日目の休息が人間のためばかりでなく「あなたの牛やろばが休むため」（出エジプト 23・12）にも意図されているのも、同様の考えに沿ったことです。

「自然のおきて」とか「被造物間に存在する繊細な平衡状態」とかいう表現が見られます。もう少し一般的に言うと、すべての自然物に備わっている本性^{ほんせい}と、自然界のあらゆる営みを支えている本性的秩序^{ほんせい}のことでしょう。本性という語は自然物の本来のあり方を指し、特にいのちあるものや有機的なはたらきを指す言葉です。それぞれのものに、猫には猫の、犬には犬の、ゴキブリにはゴキブリの本性があり、その本性を備えているものにしか実現できない固有の善さがある、ということです。本性的秩序は、自然物の間にある本来的なつながり、然るべく生かし合う関係がある、ということです。ですから、人間はそうした本性や本性的秩序を把握し、然るべき取り扱いをしなければならないのです。実に、人間が自然界を科学的に研究するのも、そうして見出される本性や本性的秩序に沿って然るべく自然を活かすためである、とも言えます。人間の知性や理性にはそうした役割があるのです。「超ええないおきて」、超えてはならない守るべき定め、逸れてはならない留まるべき道があります。

「ろばまたは牛」や「母鳥..雛と卵」に言及する申命記の一節。家畜をはじめ、動物や鳥、いのちあるものに対する然るべき態度はどういうものかを問う箇所のようにも思えます。母鳥を射止めて食していいのでしょうか。あるいは、いわゆる殺生は一切駄目なのでしょうか。解釈に悩む人もおられることでしょうか。こうしたことも本性や本性的秩序から受け止め直すことができそうです。少なくとも、生きているものとしての仲間意識やいのちあるものへの感受性は含まれているようですね。いのちあるものには「休み」が必要です。「七日目の休息が人間のためばかりでなく」家畜にとっても意味があることを忘れないでおきましょう。

69 生き物たちは「ただ存在するだけで神をたたえ、神に誉れを帰して」おり、それゆえ主はご自分のわざを喜ばれるのです（詩編 104・31 参照）。

「主の知恵によって地の基は据えられ」(箴言3・19) たのですから、わたしたちは、その比類なき尊厳と知性のたまものゆえに、被造物とそこに備わる おきてを尊重するよう促されます。

人間以外の被造物は「ただ存在するだけで神をたたえ」ているとあります。猫に引掻かれたとしても、猫の罪だと言えるでしょうか。目に見える被造物で罪を犯す可能性があるのは人間だけです。クマに殴られて人が死んだとしても、クマはいわゆる罪なことをしたとは言えても、罪を犯したとは言えないでしょう。なぜクマと人間がそういう出会い方をしてしまったのかを見極めて、そうしたことが起こらないようにしていく責任が人間の方にあるのです。生き物たちはただ存在するだけで神をたたえ、神に誉れを帰している、心に刻んでおきたいことですね。

人間も生きており、生き物の一種ですから、生きていてだけで神を賛美しているという面も持っています。でも同時に、人間は理性や意志を使って自由に選択したり行動したりします。神への賛美につながる言動もそうでない言動もわたしたち人間には可能です。わたしたち人間には一段高い次元の賛美が求められるということでもあります。理性や意志をどう使うか、自由をどう活かすか、神を賛美する方向でそれらを働かせるようにしていく務めがあります。謙虚に学びつつ節度ある生活を通して他の被造物とかわることこそ、「その比類なき尊厳と知性のたまものゆえに、被造物とそこに備わるおきてを尊重するよう促され」ているわたしたちにふさわしい態度ではないでしょうか。

70 カインとアベルの物語は、どのように妬みが、カインに兄弟への究極の不正を犯させ、またそれが翻って、カインと神とのかわりに、さらにはカインと大地とのかわりに亀裂を生じさせ、彼がその地から追放されたのかをわたしたちに示します。このことは、神とカインとの劇的なやり取りの中にはっきりと見て取れます。神は尋ねます、「お前の弟アベルは、どこにいるのか」と。知らないと答えるカインに、神は執拗に迫ります、「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。今、お前は呪われる者となった」(創世記4・9-11)と。

わたしがその人の世話と保護の責任を負っている隣人とのしかるべきかわりを培い保つ義務を軽んじることは、自分自身との、神との、そして大地とのかわりを失うほどに損ねることになります。

こうしたかわりすべてが蔑ろにされるとき、義がもはやその地に住まわないとき、いのちそのものが危険にさらされている、と聖書はわたしたちに告げます。

つねに正義と平和の要求を満たせずにいるという理由で神が人類を一掃しようとされたノアの物語によってそのことが理解されません。

「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている」(創世記6・13)。

象徴に満ちたこうした古代の物語は、今日わたしたちが共有する一つの確信をあかししてくれます。

それは、あらゆるものはつながり合っているという確信、そして、わたしたちが、自分たち自身のいのちを真に気遣い、自然とのかわりをも真に気遣うことは、友愛、正義、他者への誠実と不可分の関係にあるという確信です。

現教皇はカインとアベルの話をよくなさいます。いわゆる兄弟殺しの始まりのお話です。カインに殺害された弟アベルの血が、流れ落ちた土の中から、神に叫びます。人間の叫びが自然の叫びを通して聞こえてくるということでしょうか。その叫びを受け止めた神がカインを問い詰めます。他者(ここでは弟)への不当なかわり方が、大地(すなわち自然)とのかわりを、神とのかわりを、自分自身とのかわりをも損ねることになるということが、「お前は呪われる者となった」という言葉から感じ取れますね。

「世話と保護の責任を負っている隣人とのしかるべきかわり」という表現に心を動かされませんか。そうした「隣人」を心にかけて守る義務を軽んじることは、自分自身との、神との、そして大地とのかわりを失うほどに損ねることに通じています。

ところで、わたしたちクリスチャンは、旧約聖書のエッセンスをつづめてくださったイエスに教えられ、神を愛し、人を愛しなさい、と教わっ

てきました。けれども、自然界の搾取が大問題であるとの自覚が共有されるようになってきた今日、キリスト教も遅ればせながらその流れに加わらないといけない、と受け止めている人が少なくないことでしょう。神を愛しなさい、人を愛しなさい、と言われたイエスが、もう一言、自然を愛しなさい、と仰ってくれていたなら、わたしたちはもっと早くこの問題に本気で取り組めたのに…。

自然を「愛する」という表現は日本人にはとても響きのよい言葉かも知れませんが、自然を「愛する」と言えばもっとびったりくる人がいるかも知れません。神を愛する、人を愛する、「プラス」自然を愛する、ということなのでしょう。神を神としてふさわしく愛するには、人を人としてふさわしく愛するには、自然を正しく活かさないとならないでしょう。自然を正しく活かすことなしに、神にふさわしい仕方で神を愛し、人にふさわしい仕方で人を愛することはできそうにありません。ということで、「自然を愛する」という表現は確かに響きのいい通じやすい言葉ですが、「神を愛する」や「人を愛する」と言うときの「愛する」とは根本的に違うとわたしには思えるのです。神を本気で愛するのであれば、人を本気で愛するのであれば、自然物や自然界を、被造物や被造界を正しい仕方で活かさなければならぬ、ということでしょう。ただし、活かすということには、場合によっては一切利用しない、何もしないという可能性も入っています。

さて、皆さんにとって「世話と保護の責任を負っている隣人」とは誰のことですか。隣人との然るべきかかわり、自然界との然るべきかかわり、神との然るべきかかわり、自分自身との然るべきかかわり、これらはワンセットで考える必要があるということなのです。

因みに、「あらゆるものはつながり合っているという確信」と聞くと、わたしはバリー・コモナーという生物学者が書き残した4つの文章を思い起こします。エコロジーの真髄とも言えるもので、英語で確か以下のような…。

Everything is connected with everything else.
Everything goes somewhere.
Nature knows best.

There is no such thing as a free lunch.

第一番目の「すべてのものは他のすべてのものにつながっている」というのは、エコロジカルなものの方の見方の根本とも言えるでしょう。現教皇もエコロジカルにもものを捉える人の一人であることが窺えます。つながり合っている、つまりは、影響を及ぼし合うということ。小さなことだとしても影響を及ぼす可能性がある、ということをお忘れしないで生きていこうと思う今日この頃です。

71 「地上に人の悪が増し」（創世記6・5）、主が「地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」（創世記6・6）にもかかわらず、神は、咎なく正しい人にとどまったノアを通して、救いの道を開くことをお決めになりました。

神はイスラエルに、七日ごとに休息の日すなわち安息日を確保するよう、お命じになりました（創世記2・2-3、出エジプト16・23、20・10参照）。

七年ごとに安息の年がイスラエルのために確保され、土地には完全な休息が与えられました（レビ25・1-4参照）。その間、種蒔きは禁じられ、人は自分と家族が生きていくために必要なものだけを収穫しました（レビ25・4-6参照）。

安息の年を七回、すなわち四十九年が経つと、ヨベルの年が、一般的なゆるしと「その土地に住んでいる全住民の解放」（レビ25・10参照）の年として祝われました。

「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない」（レビ19・9-10）のです。

社会問題をキリスト教的に受け止めてどう対応するかを示すカトリック社会教説の基本的な考え方が含まれています。いのちあるものは休息を必要とする、というのもそうですが、土地は主のものである、という

のもそうです。与えられた土地をどういうふうを活かすかについての責任をわたしたち人間は問われます。土地は売買する商品に過ぎないものではなく、何より、人々が人間らしい生活を送れるよう神から提供されているいのちとまじわりの場であるのです。

「ヨベルの年」が出てきます。50年目の大きなお祝い事を意味する英語の言葉 jubilee は、その元になっているヘブライ語のヨベルの3つの子音 (j, b, l) を受け継いでいます。土地を賜った神の恵みを思い起こし、そうした恵みにふさわしい共同体を作っていこうと心を新たにすると年でもあります。いろいろな理由で土地を切り売りしなくてはならなかったとしても、50年経ったら元に戻される時が訪れる、「その土地に住んでいる全住民の解放」の年が巡ってくるのです。何とも都合のいいお話に聞こえますが、民が皆で末永く平和に暮らしていくために神が分かち与えてくださった土地は互いに守り合わなければならない、という真実が語られているのでしよう。

確か「ジュビリー 2000」でしたでしょうか、この「ヨベルの年」の考え方に基づいた運動が西暦 2000 年頃にありました。借金で喘いでいる発展途上諸国の債務をチャラにしてあげよう、という国際的な取組みで、カトリック教会もそれに加わりました。全世界の国々がそういうふうなかかわり方を目指せばどれほどいい世界になることでしよう。

いわゆる「落ち穂拾い」の話が出てきています。四角い部屋を丸く掃いていい、雑な仕事でいい、というのが主旨ではありません。一粒の落ち穂も残らないように全部きれいに収穫し尽くすと、土地も仕事もない人が拾いに来ても何も持って帰るものがないわけです。貧しい人には生きていくための食べ物がない、というのは神の民イスラエルの中ではあってはならない状況だ、という共通認識です。自分の土地を持たず仕事もない人たちにも、神は生きるための糧を与えようと望んでおられ、貧しい人々にはその権利があるということを肯定し保証する共同体こそが神の民です。現代に生きるわたしたちも、いわゆる恵まれていない人々が人間らしく生きていけるような食糧等の必需品の分配の仕方を考え直す必要がありそうですね。

[72] 詩編は、「大地を水の上に広げたかた」である創造主なる神への

賛美を盛んに勧めます。「いつくしみはとこしえ」であるからです(詩編 136・6)。

「日よ、月よ、主を賛美せよ。輝く星よ、主を賛美せよ。天の天よ、天の上にある水よ、主を賛美せよ。主のみ名を賛美せよ。主は命じられ、すべてのものは創造された」(詩編 148・3-5)。

「大地を水の上に広げた方」、「いつくしみはとこしえ」、こういった感性は、現教皇が範とするアッシジの聖フランシスコには溢れるばかりに見て取れます。あらゆる被造物を主への賛美に誘う聖フランシスコの祈りが思い起こされます。宇宙を創造された全能の神を観想し、すべての被造物とともに主を賛美することは、試練の時に新たな力を見出すよう招いてもくれます。

[73] 預言書は、宇宙を創造された全能の神を観想することで、試練の時に新たな力を見いだすよう、わたしたちを招きます。「ああ、主なる神よ、あなたは大きな力を振るい、腕を伸ばして天と地を造られました。

あなたのみ力の及ばないことは何一つありません。……あなたは、しるしと奇跡をもって、あなたの民イスラエルをエジプトの国から導き出されました」(エレミヤ 32・17, 21)。

「主は、とこしえにいます神、地の果てに及ぶすべてのものの造り主。倦むことなく、疲れることなく、その英知は究めがたい。疲れした者に力を与え、勢いを失っている者に大きな力を与えられる」(イザヤ 40・28b-29) のです。

創造主なる神が、人間であるわたしたちを含め、すべてのものをお造りになりました。その中で人間は特別な位置に置かれ特別な責任を課されています。このことが本気で飲み込めたなら、きっと人生、変わりますよね。創造主を信じるということは、人として生きる上で非常に大きなインパクトを持つもので、生涯を貫く課題でもあり続けます。それは、人々を呼び集め神の民イスラエルをお造りになった神の創造的なはたらきが天地万物をお造りになった創造主のみわざの一部であるということ

を受け入れることでもあります。わたしたち信仰者は、創造主とそのはたらきの偉大さに圧倒されながら生きていくことになるでしょう。

74 「全能者である神、主よ、あなたのわざは偉大で、驚くべきもの。あなたの道は正しく、また、真実なもの」(黙示録 15・3) と、全能の神へのいやます信頼のうちに慰めと希望を再び見いだしたのです。

75 大地に対する絶対的支配の主張に終止符を打ち、人間をしかるべき場所に連れ戻す最善の道は、世界を創造し、その唯一の所有者である御父の姿について今一度語り直すことです。

89 「いのちを愛される主よ、すべてはあなたのもの」(知恵 11・26) とあるとおり、この世の被造物は所有権と無関係ではありません。

わたしたちクリスチャンは、イエス・キリストを宣べ伝えます。特に彼の復活や受肉(イエスが人となられた神であるということ)の神秘を中心にして、唯一の救い主であるイエスがわたしたちのところに来てくださり、わたしたちが尊厳ある人格として尊重し合えるようにして下さるという「福音(喜びのしらせ)」を伝え続けてきました。そこには、イエスが親しく「お父さん」とお呼びになった天の父なる神がいかなる方であり、いかなる存在であるかを告げ知らせることもまた含まれています。それは、「大地」の「唯一の所有者である御父の姿」を語り伝えることだ、とも言えます。

愛そのものである創造主が存在し、いつくしみのわざを続けておられる、という信仰は、宗教の如何を問わず、あらゆる文化を超えて、共有され得る人類一致の原点だ、と教皇は考えておられるようで、わたしも同感です。全宇宙の創造主である神がわたしたち人間をご自分の似姿としてお造りになり、ご自分がお造りになった天地万物を完成へと導くいつくしみのわざの協力者としてわたしたち人間をお立てになった、という信仰です。この創造主の愛といつくしみを、その方を親しく父と呼ぶイエスの言動やその生涯に触れ馴染むことによって知り、イエスとの親しさを深めることを通してより深く知っていくことができ、すべてがこのいつくしみの神からのものだ、と謙虚に認める生き方が確かなものと

されていきます。

77 「みことばによって天は造られた」(詩編 33・6)。「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。憎んでおられるのなら、造られなかったはず」(知恵 11・24)なので

このパラグラフの「詩編」と「知恵の書」の言葉はストレートに響いてきませんか。天がその秩序の見事さを通して語り出すのは創造主の知恵に満ちたことば。創造主は「何一つ嫌われない」とは、嫌なものをお造りになるはずがない、という真実を語っています。

81 創造に関する聖書記事は、客体の範疇には決して還元されえない主体として人間一人ひとりを見るよう、わたしたちを招きます。

82 しかし、人間以外の生き物たちを、人間の恣意的な支配に服する単なる客体とみなすのもまた間違いです。自然を利潤や収益を生む元金としかみなさないなら、それは社会にゆゆしき結果をもたらします。「力は正義なり」というものの見方が、途方もない不平等や不正義、そして人類の大多数に対する暴力を生みます。資源は一番乗りした者や権力者に握られることとなるからです。つまり、勝者がすべてを取るのです。

イエスによって提示された調和、正義、友愛、平和といった理想は、こうしたモデルとまったく相いれません。イエスが、同時代の権力者たちについて、「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になりなさい」(マタイ 20・25-26)といわれたとおりです。

確かに、人間は主体であって、ただの物ではありません。だからと言って、人間の主体性を重んじるあまり、人間以外のものを、人間が恣意的に、したい放題にしていいいわけではありません。人間を特別のものとする

る聖書やキリスト教は、それを理由に疎まれることもあるようですが、それは誤解に基づいている、と言われていいます。

わたしたち人間は「勝者がすべてを取る」世界を作り上げてしまいがちです。勝ったものがすべてを手に入れる、それこそがこの世の常だ、と言い捨ててしまいたくなることもあるでしょうが、本当のところそれでは心は満足しないでしょう。

皆さんの中に、自衛のための戦いを止めなさい、という人はほとんどいないことでしょう。現に侵略を受けている自分たちの国を、国民を、家族を守ろうとするのですから全否定はできるはずありません。自衛のための戦いには認められる面があるとカトリック教会も考えていますが、だからといって戦争を正当化しているわけではありません。

そこには非常に難しい問題が横たわっていると認めざるを得ません。力と正義との関係という問題がそこには潜んでいます。現実の世界のあちらこちらに見受けられる「力で事を進める」というやり方は正義をもたらすどころか正義を遠ざけてしまいがちです。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になりなさい」。わたしたちは皆、心の底では、その通り、と頷き、そのように生きていければ、と願っているのではないのでしょうか。

96 イエスは、神は父なり（マタイ 11・25 参照）という根本的な真理を強調しつつ、創造主なる神を信じる聖書の信仰を取り上げました。「五羽の雀が二アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない」（ルカ 12・6）と、その一つ一つが神の目に大切なものと映っていることを、思い起こさせようと思いました。

「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる」（マタイ 6・26）のです。

ルカの福音書には「五羽の雀が二アサリオン」とありますが、マタイの福音書では確か「二羽の雀が一アサリオン」だったような気がします。どうしてマタイではなくルカが引かれているのでしょうか。五羽だと割り

切れませんね。五羽の雀が二アサリオンだとすると一アサリオンでは五羽のうちの二羽しかもらえない、あるいは一羽を半分にして二羽プラス半分もらうことになるのでしょうか。わたしたち人間が営んでいる経済活動の中では「五羽の雀が二アサリオン」で売られることはしばしばでしょう。ところが、イエスは、一羽一羽の雀のいのちを心にかけてくれる父なる神が存在する、と仰りたかったようです。「五羽の雀が二アサリオン」、印象深いですね。

さて、回勅の中で引用・参照されている聖句はまだありますが今日はここまでとさせていただきます。残された時間で、わたしの考えを述べさせていただきます。存じます。

II. 自然と仲直りするための3つの心得

これまで学んできた環境倫理学を「自然と仲直りするための3つの心得」として紹介させていただきます。

①人間以外の生命の内在的価値の尊重

人間にはもちろんですが、人間以外の生き物にも尊重すべき価値がある、ということです。人間にとって都合がいいとか悪いとか、人間にとって役立つとか役立つないとかという「道具としての価値」だけでなく「そのものとしての価値」があるということで、「内在的価値」、「目的価値」、「固有価値」、「内属的価値」とも言われます。

②将来世代の生存条件への配慮

今生きているわたしたちが活着している間に石油とか石炭とかを使い尽くしてしまうのはいけないことですよ。将来の世代が使えるように残さないといけませんよね。わたしは、石炭や石油を一切使ってははいけません、と考えたことはありません。でも、使い方は考えないといけませんね。いろんな技術を開発することも大事でしょう。でも、一番の原理は、将来の人たちが必要なときに使えるように残しておかなくてはならない、ということだと思っています。CO₂をたくさん出さないようにすることも重要ですが、それも将来世代への責任としてです。ですから、将来世代の生存条件への配慮はわたしたちの務めだ、と言えます。

③地球の有限性の自覚に基づいた生き方

地球はあらゆる意味で有限です。無限に物があるように感じるには「循環」しているからです。水も無限にあるように思えますね。でも、それも「水循環」のおかげです。気体（水蒸気）になり液体（水）になり固体（氷）になりながらぐるぐる循環しています。この循環が途絶えたら、これはもうたいへんなことになってしまいます。ですから、無限にあるわけではないという現実つまり「有限性」をしっかりと自覚した上で生きていく必要があります。そこから、分かち合わなければならない、というわたしたちの責任が生じます。限りある天然資源、限りある自然エネルギー、限りある自然の浄化・回復能力を皆で分かち合って生きていかなければなりません。要するに、これまでのような贅沢な生活は到底できないということでしょう。

こうした三つのことを踏まえてわたしは次のような文章を認めたことがあります。

このような自然とのかかわりに関する心得が個々人にも社会全体にも浸透していくためには、この有限な地球を遠い過去から現在へと一つの運命を共有するまでに育ってきた多様な生命の織物（web of life）として観るまなざしと、未来の人々にどのような地球を譲りわたしていくべきかをくりかえし問うゆとりが共有されなければならぬまい。

必ずしもうまく行っているわけでないものの、大学で若い人たちに勉強をさせるのがわたしの仕事です。勉強するにはきちんと問うゆとりが要ります。ゆとりがないとじっくりと問いに向き合うことなどできません。今の学生に言いたいことの一つですが、勉強するためのゆとりをとってほしいです。

Ⅲ. 自然への然るべきかかわりの模索は創造主に対する責任

幾年前前、環境時代に生きるクリスチャンとしての責任について書く機会に恵まれました。その中でわたしは、『回勅 ラウダート・シ』の著

者である教皇フランシスコのお考えについてのわたしなりのまとめと、自分の研究らしきものの総括とを書かせてもらいました。

環境問題への真摯な取り組みは創造主から責任を問われる信仰上の課題であるとの教皇の確信は、信仰者、無信仰者を問わず、環境問題と格闘する多くの人々に歓迎されました。環境問題にしっかりと向き合い、その軽減や解消のために働き続ける人々の中で醸成されつつある誠実な現実認識や粘り強い実践努力の中に、教皇は、創造の御業たる被造界に刻み込まれたいつくしみの神の福音への開きを見ておられるように思われます。

〈無関心のグローバリゼーション〉に抗う〈ケアの文化〉を育みうる〈新しいライフスタイル〉を確立していくための〈率直で透明な対話〉の席に今すぐ着こうとすべての人の背中を押す教皇は、〈健やかな謙遜〉や〈喜ばしい節欲〉を目に見える形で生きさせてくれる知恵と力の泉たる〈エコロジカルな霊性〉と、その泉から飲ませる〈エコロジカルな教育〉の重要性を語られます。

「環境問題と格闘する多くの人々」、「環境問題にしっかりと向き合い、その軽減や解消のために働き続ける人々」が皆、創造主である神を信じているわけではないでしょうが、そういう人々の言動や生き方の中に「創造の御業たる被造界に刻み込まれたいつくしみの神の福音への開き」が具体的に現れ出ている、と教皇フランシスコは受け止めておられるようです。

以下は、これまでの研究らしきものの総括です。

「限りある天然資源」は「皆で」譲り合い〈まずもって貧しい人々と〉分かち合うべきものであり、その「皆」は「将来の子孫たち」を遠く〈終わりの時まで〉射程に収めたものでなければならず、その「子孫たち」の〈人間の尊厳にふさわしい生の質〉は生息環境を共にする「あらゆる生き物」の「然るべき共生の持続的保全」なしにはあり得ません。この真実を正直に認めそこに含まれる責任を潔く受諾しつつ〈ともに暮らす地球を大切に〉する人々の輪に、いの

ちの絆を強める奉仕の心を携えて、加わるよう、わたしたち信仰者は呼ばれています。

以上で今日のお話を終わらせていただきます。教皇フランシスコの『回勅 ラウダート・シ』の中の聖句を味わうためのささやかな招きになったとすれば、嬉しいかぎりです。

ご清聴、ありがとうございました。

(付記：本稿は2022年9月24日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演を文章化したものです。)